

ヒンドゥー教のクリシュナ寺院の組織と運営 —インド・ヴリンダーヴァンのラーダーラマン寺院 の事例から—

澤田彰宏

はじめに

本稿はヒンドゥー教のクリシュナ寺院の運営について、インドのヴリンダーヴァン (Vrindāvana)¹ に所在するラーダーラマン寺院 (Rādhāramaṇa Mandira)² を事例として、その現地調査から明らかにすることを目的とする。以下では、ラーダーラマン寺院が属するヒンドゥー教のチャイタニヤ派、寺院が所在する聖地ヴリンダーヴァン、ラーダーラマン寺院運営の人的面 (ゴースワーミー師) と組織面 (パンチャーヤト)、師弟の交流の順でみていく。

1 チャイタニヤ派と聖地ヴリンダーヴァン

ヒンドゥー教チャイタニヤ派の開祖チャイタニヤ (Caitanya, 1485-1533 ころ) は、現在の東インド・ベンガル地方のナヴァドゥヴィーパ (ノボディブ) 出身のブラーマン (バラモン、以下ブラーマンと表記) である。チャイタニヤは元来学僧で『バーガヴァタ・プラーナ *Bhāgavata Purāṇa*』を教えていたが、しだいに賛歌を合唱しながら楽器を鳴らして歌い踊る詠歌行進を行ってクリシュナ神 (Kṛṣṇa、以下クリシュナと表記) とその恋人ラーダー (Rādhā) を熱狂的に崇拝する宗教運動を起こした。その影響はベンガルやオリッサなど東インドだけでなく、北インドや西インドにも広く及んだ。

チャイタニヤ自身は著作を残さなかったが、後に弟子によってヴェーダーンタ哲学に基礎づけられた彼の教説は不可思議不一不異説 (論) と呼ばれる³。チャイタニヤ派は、ガウリーヤ・ヴァイシュナヴァ (Gauḍīya Vaiṣṇava) と呼ばれ、中世に始まるヒンドゥー教ヴィシュヌ派 (ヴァイシュナヴァ) のバクティ (bhakti、信愛) 運動・信仰における有力な一派となって現在に至っている。チャイタニヤ派の信仰が広がった理由のひとつに、開祖チャイタニヤ自身が旅をしながら信仰を形成していったことが挙げられる⁴。その過程で彼はベンガルとオリッサ (ジャガンナート・プリー)、そして1515-16年頃にはヴリンダーヴァンに滞在し拠点形成した⁵。滞在を長く続けたのは亡くなったオリッサの地とされるが、当時、イスラーム王朝の影響下で荒廃していたヴリンダーヴァンには自分の

弟子6人を派遣しクリシュナ信仰の聖地復興を担わせた。

ヴリンダーヴァンは北インドのウッタール・プラデーシュ州（以下、UP州と表記）の西部ブラジュ地方 Braja⁶ に位置する町で、ヒンドゥー教のクリシュナ信仰の重要な聖地である。デリーの南南東130キロほど⁷で、この地方の最大の町のマトゥラーからは北に10キロほど離れた場所にあり、南東にアグラ、北東にはアリーガルがある。ブラジュ地方の西はラージャスターン州である。ヴリンダーヴァンの北から東、そして南側に沿って聖河ヤムナー川が流れ、マトゥラーへと続いている。

クリシュナ神話においてこの町は、彼が青年時代を過ごし、数多くの羅刹を退治し、そして彼を慕う牧女（ゴピー）たちとの恋が語られる舞台となっている。現在、この町には数多くのクリシュナ寺院があり、インド全国からの巡礼者をあつめている。そしてそれらの寺院の多くは、中世に興ったバクティ信仰の諸宗派のものである。

さらにブラジュ地方は、ヴリンダーヴァンの他にマトゥラー、バルサーナー、ゴークル、ゴヴァルダンなどのクリシュナ神話の舞台として、全体が巡礼地（ブラジュ84コーシュ）でもある。

2 ヴリンダーヴァンの諸宗派とチャイタニヤ派寺院

ヴリンダーヴァンにはチャイタニヤ派の他に、ニンバルカ派（ニンバルカ創始）、ハリダース派（ハリダース創始）、ラーダーヴァッラバ派（ヒト・ハリヴァンシュ創始）などのクリシュナ・バクティ信仰の宗派の寺院が多くあり、それぞれ的一大中心地となっている。同じくクリシュナ信仰で有力なヴァッラバ派の寺院はヴリンダーヴァンよりも、マトゥラーやゴヴァルダンに多い。

チャイタニヤがヴリンダーヴァンに派遣した6人の弟子は、ループ（Rūpa）、サナータン（Sanātana）、ラグナート（Raghunātha）、ジーヴ（Jīva）、ゴパール・バット（Gopālabhaṭṭa）、ラグナートダース（Raghunāthadāsa）のゴースワミーである。彼らはヴリンダーヴァンにおいて6人のゴースワミー（cah: /ṣad Goswamī）と呼ばれる。

さらにヴリンダーヴァンには「七寺院（Sapta Devālaya）」と呼ばれるチャイタニヤ派の諸寺院がある。本稿で扱うラーダーラマン寺院はその一つである。他の寺院は、ラーダー・マダンモーハン寺院（Rādhāmadanmohana）、ラーダー・ゴヴィンドデーオ（Rādhāgovindadeva）、ラーダー・ゴピーナート寺院（Rādhāgopinātha）、ラーダーヴィノード・ゴークラーナンド寺院（Rādhāvinodagokulānanda）、ラーダー・ダーモーダル寺院（Rādhādāmodara）、ラーダー・シャームスダル寺院（Rādhāśyāmsundara）である。

3 本研究の調査の概要

3-1 先行研究

ラーダーラマン寺院に直接言及した先行研究は多くはない。ブラジュ地方の地誌としての A. W. Entwistle の研究⁸、坂田貞二、橋本泰元によるブラジュ巡礼文献についての研究⁹、坂田と橋本に田中多佳子と福永正明を加えた同巡礼の総合的研究¹⁰、さらに橋本によるラースリーラー（クリシュナ神話劇）と寺院内での儀礼と祭礼についての研究¹¹、J. S. Hawley のラースリーラーの研究¹²、そして及川弘美による同寺院の神像の研究¹³、同寺院の当事者かつ研究者双方の立場での S. Goswami による主に寺院内で儀礼についての研究¹⁴ などにおいて、この寺院について触れられている。しかし、以上のどの研究においてもラーダーラマン寺院の組織や運営についての詳細は不明である。また、どれもすでに発表から 20 年から 40 年近くを経過している。現在までのところ筆者が確認できた限りでは M. Case の研究¹⁵ がラーダーラマン寺院について述べているものでは最も詳しいものであるが、やはり調査の時期が一世代前のものとなっている。また田中には、ラーダーラマン寺院を含むヴリンダーヴァンの諸宗派・寺院で行われるサマージュ・ガーヤン（集団歌謡）についての大部の研究がある¹⁶。

本稿は以上のような研究の動向から、チャイタニヤ派ラーダーラマン寺院の運営について人と組織の両面を明らかにする試みとして、現地調査の結果を報告するものである。

3-2 調査方法

現地調査ではラーダーラマン寺院内外での観察と寺院関係者へのインタビューを実施した¹⁷。2度の調査でインタビューを計5人に実施したが、本稿で参照したのは主にそのうち3人のブラーマン男性のものである。この3人はラーダーラマン寺院の聖職者のゴースワーミー師の家系（後述）である。この三師をインタビューした日付順に記すと、

A 師、60 代後半（2019 年 8 月 25 日）

B 師、60 代半ば（2019 年 8 月 25 日、補足 26 日）

C 師、40 代前半（2019 年 8 月 29 日）

となる。なお、A 師と C 師は父子である。

インタビューでは各師の自宅にて約 1 時間前後の聞き取りを、寺院の組織や彼らの活動の質問を中心にして行なった。以下では、三師へのインタビューから得られた情報については、例えば A 師からの情報であれば (A) として、その文末に記すこととする¹⁸。

4 ラーダーラマン寺院について

4-1 寺院の由来

ラーダーラマン寺院を創建したのはチャイタニヤの直弟子であるゴーパール・バット・ゴースワーミー師である。ラーダーラマン寺院が信徒向けに発行する冊子によると、ゴーパール・バットは1500年南インドのヴェーラングリー村の生まれで、父のヴェーカントバットも著名なパンディット（学僧）であった。彼の村にチャイタニヤが訪れ滞在したことで弟子になり、後に師の命によりヴリンダーヴァンに赴いた。ゴーパール・バットがネパールのガンダギー川で得た複数のシャールグラーム¹⁹をヴリンダーヴァンのヤムナー川のほとりで祀っていると、1542年のヴァイシャーカ月（バイサーク、4-5月頃）のプールニマー（満月の日）にそのうちのひとつからラーダーラマン（「ラーダー Rādhā を愛するもの」の意、クリシュナのこゝ）神が顕現した。これが現在もラーダーラマン神として祀られている像であり、このときが同寺院の創建とされる²⁰。

ゴーパール・バットはヴリンダーヴァンに向かう途上、現在のUP州デーオバンドでゴピーナート（Gopīnātha）とダーモダルダース（Dāmodaradāsa）を弟子にして、この兄弟にラーダーラマン寺院を任せた。このダーモダルダース師の末裔が後述する同寺院の輪番住職のゴースワーミー師の家系とされる。現在、同時院で唯一祀られる像であるラーダーラマン神像に触れることが許されるのは、この像に奉仕するゴースワーミー師たちのみである。

この寺院の存在は、16世紀に成立したされるこの地方の巡礼書であるゴークルナート（Gokulnātha）作の『ブラジュ地方巡礼（Śrī Braja Maṇḍala Parikramā）』に、他の有力寺院とともに「ラーダーラマン」の名があり、他の諸寺院（特にニド・ヴァン）との位置関係から、当時から現在とほぼ同じ場所にこの寺院が所在していたことがわかる²¹。同寺院はクリシュナ神話でも語られるヤムナー川の沐浴場のケーシー・ガートやチール・ガートにも近い。

4-2 現在の寺院の建物

現在のラーダーラマン寺院はゲーラー（Gherā、囲み）の中にある。表通りに面した門からゲーラーの中に入ると、まずゴースワーミー家の人々が住む複数階建ての住居が小道の両側に並び、その先に寺院がある。現寺院の建物は19世紀中ごろに北インド・ラクナウーのナワーブであるワジード・アリー・シャーの大臣だったシャー・クندان・ラールによって建てられたものである（AおよびC）。旧寺院だった建物は、現在ではラーダーラマン神へのプラサード（prasāda、供物）を調理する台所となっていて、新寺院とは内部通路でつながっている（C）。そしてゲーラー内には、ラーダーラマン神像が顕現した

とされる場所 (prākāṭya sthala) を祀った建物と、過去のゴースワミー師たちを祀ったいくつものサマーディ (samādhi) がある建物もある。

ラーダーラマン神像顕現地はゲラーの門をくぐった左手にある建物の中にあるさらに小さな寺院である。そのさらに横にあるのがサマーディのある建物である。この中にさらに開基のゴパール・バット師を祀る小さな寺院のような建物があり、そしてその小寺院の外側の壁に沿って現在に至るまでのゴースワミー師たちの掌ほどの小サマーディが置かれている。このサマーディは後述するパンチャーヤトの管理下にあり、費用も支出されているが、日々の奉仕はガウリーヤ・ヴァイシュナヴァのプジャーラー (pujārī, 儀礼を行う僧、オリッサ出身) に任せている。ただし、彼らはラーダーラマン寺院のゴースワミー師ではない (B)。

その他ゲラー内には、ゴースワミー師個人が所有している寺院も2つある (B)。

現在のゲラーの外側の寺院門前は路地があり、その路地を挟んだ正面には常設のラーズリーラーの舞台ラースマンダルがあるが、現在ではここは使われていないようである。

5 輪番住職のゴースワミー師たち

5-1 ゴースワミー家の由来

前述のように、ラーダーラマン寺院で神像に仕えているのは開基ゴパール・バットの弟子のダーモーダルダース師の子孫の末裔²²とされる「40家」のゴースワミー師たちである。ダーモーダルダース師を等しく祖先にもつと認識する彼ら一族の男性が、現在でも輪番住職として同寺院の神像に仕える儀礼 (sewā, セーワー) を行うプジャーラーとして活動している。彼らの姓はすべてゴースワミー²³であり、お互いを親戚と認識している。同様に皆ガウル (gaurā または gauḍa) ・ブラーマンで、そしてシャーンディリヤ・ゴートラ (śāṅḍilya gotra) である (A.B.C)。ラーダーラマン寺院での儀礼の遂行はこのゴースワミー家の男性全員による輪番住職の形をとっていて、セーワーをするプジャー



写真1

ラーダーラマン寺院の本殿 (中央)。手前両側の建物はゴースワミー師の住居 (2019年2月筆者撮影)。

リーは「40家」のゴースワミー家からしか出せない。

この家系の数は先行研究などでは一般的に「40家」とされているが、筆者がB師から聞き取りの際に提供された現パンチャーヤト選挙人（後述）のリスト上では、存命の家系は29家だという（B）。しかし、リスト化されていない家族も併せれば現在それは40家以上であるようで、別の聞き取りでも40家以上あるとの回答が得られた。（ただし具体的な数までは出なかった。AおよびC²⁴）。つまり「40」という数字は彼ら自身の家系意識を表す象徴的なものなのであろう²⁵。そこで本稿でも「40家」として表記する。

この「40家」制の起源については、ダーモーダルダースの次の世代から始まったもので彼の子供たちが輪番職を始めた（A）、ダーモーダルダースの孫の世代から始まったが、正確な年代はわからない（C）、などのように一致した回答はなかったが、自分たちの祖に近くさかのぼるものとの意識はあるようである。

この家系を維持するために、ゴースワミー男性の結婚相手には同じゴートラ出身ではない（つまりゴースワミー家出身ではない）ブラーマンの女性が求められる（A.B.C）。そして、夫婦の間に男子が生まれなければ寺院のセーワーができるゴースワミーの家系は断絶し、例外は認められない（A）という。夫婦に男子が生まれない場合、彼らは跡継ぎのための養子を取ることはできず、この夫婦の代でそのゴースワミー師の家系は断絶する。さらに非ブラーマン女性との異カースト間結婚の場合は、生まれた子が男子でも将来ゴースワミー師になる資格はなく、同様に断絶することになる。

このように排他的な面がある一方で、内部では「40家」のゴースワミー師は全て同等の権利をもち、親子や兄弟間であっても区別はないとされる（AおよびB）。つまりラーダーラマン寺院では、このゴースワミー師の家系に生まれた男性であれば、父、長男、次男などの順に関係なく同等の師として活動ができて、同時に各家の間での序列等もないとされる。違いは寺院でのセーワー担当の順番が年齢順であるような程度だという（B）。そして、同寺院はこのゴースワミー師たち全員の共有財産とされる。

この家系に生まれた男性は自動的にゴースワミー師となる存在である（C）が、彼らがラーダーラマン寺院でブジャーリーとしてセーワーをするためにはディークシャー（dikṣā）という入門儀礼を他のゴースワミー師から受けなくてはならない（A）。まずブラーマンの聖紐（ジャネウー）を受け、その後18歳になったらラーダーラマン寺院のゴースワミー師（誰でも可）からディークシャーを受ける（ジャネウーはそれ以前に受けられる）。ディークシャーを受けた後は寺院内でラーダーラマン神へのセーワーができるようになる（B）。

現在では彼らの子弟をブジャーリーとして教育するための寺院機関はなく、個々に教育するという（A）。ディークシャーを受ける年齢も18歳からとされているが、実際には個人の自由で18歳（C）、24歳（B）、35歳（A）と様々である。三師とも大学ではM.A.（修

士課程) までを修了して、それぞれの専攻は、考古学 (C)、商学と経済学 (B)、インド哲学 (A) とこれもさまざまである。そしてディークシャーを施すのは必ずしも父親とは限らず、オジ (B)、祖父 (C) などでもある。

ところが、ディークシャーを受けセーワーができる正式なゴースワミー師は、出家してサンニャースインになることが実質禁止されている。もちろんゴースワミー家の誰でもサンニャースインになることは可能なのだが、サンニャースインは寺院内陣への入場もセーワーを行う権利も失うためである (A)。

5-2 ゴースワミー師の輪番制

ラーダーラマン寺院では、これら「40家」の全家系を大きく5つの系統 (ターマータthāma) に分けて、その5系統内で順番に日々のラーダーラマン神像へのセーワーのための輪番職を振り分けている。この輪番制はB師の回答によると、

- ・5つの家系に6か月ずつの配分と決まっているので、各ゴースワミー師にセーワー職が回ってくるのは2年半ごと。
- ・セーワーの期間は家庭の規模によって異なる。
- ・なぜなら個々のゴースワミー師は親のセーワー担当日数を受け継ぐからである。例えば、B師の父は34日間だったので、B師とその兄弟1人は等分に17日間ずつ受け継いだ。そしてB師の2人の息子はいずれ8.5日ずつそれを受け継ぐことになる。またB師の兄弟にはひとり息子がいるので、その息子はB師の兄弟の日数17日間をそのまま受け継ぐことになる。また例えば、2人兄弟の一方が死んだとき、その死んだ兄弟に息子がいなければ存命中の兄弟に彼の期間が足されることになる。
- ・系統・家系内全体の人数が増えれば、個々のセーワー職の期間は短くなる。
- ・現在は5番目の系統の配分が一番大きい (存命は2人の男性のみのため)。

以上のようにして、ゴースワミー師たちはラーダーラマン寺院内でのセーワー職を分割している。

6 ラーダーラマン神へのセーワー

6-1 アールティーとダルシャン

クリシュナである本尊のラーダーラマン神像は高さ30センチほどの漆黒で、少年のような雰囲気、腰を左側に膝を右側に軽く曲げて両足を交差する姿勢で横笛を持つポーズをしている (実際に笛を持つことはない)。この笛を吹くポーズはクリシュナがゴーピーたち、特に恋人ラーダーと睦みあう場面を意味する。同寺院ではクリシュナ (ラーダーラマン) の左側にラーダーの像はないが、そこに天蓋と衣服があり祀られていることになっている²⁶。

この像に毎日のプージャーをして奉仕することがセーワーである。全てのセーワーはプジャーリーによって行われ、プジャーリーは全てゴースワミー師である (A.B)。担当人数については、2人だが、それ以上いてもよい (A)、2人 (一人は朝、一人は夕) かそれ以上 (B)、とされる。

セーワーの中心はアールティーである。プジャーリーはラーダーラマン神像に向かって、左手に鈴を持って鳴らしながら、手燭を右手に持ち腕を聖音オームの形で何度も回して神を供養し、供え物をする。これを早朝から夜まで通常は7回、祭りなど特別な時は8回行う (B)。参拝者は一段低くなっている外陣からこれを見守り、アールティーが終わるとラーダーラマンを讃える声を上げて礼拝する。各アールティーの名前はマンガル (Mangala)、ドゥープ (Dhūpa)、シュリンガール (Śringāra)、ラージ・ボーグ (Rāj bhoga)、ドゥープ、サンディヤー (Sandhyā)、シャヤン (Śayana)、加えてサンディヤー後にアウラーイー (Aulāi、ダルシャンのみ) がある²⁷。セーワーは早朝4時半-5時に始まり、寺院は午後一度閉ざされ、17時半に再開門し (B)、最後のシャヤン・アールティの後21-23時頃に終わる (C)²⁸。

寺院への参拝者がラーダーラマン神を直接見ることができるのは、神像を拝する (ダルシャン darśana²⁹) ときである。ダルシャンはこれらの各アールティーに続いて行われるが、インド人だけでなく外国人参拝者も多い³⁰。この時本殿では常に音楽が生演奏されており、それがスピーカーから大音量で流される。夕方から夜のダルシャンでは踊りだす人も多い。ダルシャンが終わると参拝者にトゥルシーの葉や果物などのプラサードが配られる。

このようにプジャーリーは毎日ラーダーラマン神の起床から就寝まで奉仕するが、神像の服も日に2度ずつ替える (朝とサンディヤー・アールティーの後)、さらにディーパーワリー祭やホーリー祭のときは仕事が増える (C)。暑い夏は神像の下半身のみにはズボンを穿かせ、反対に寒い冬には服を多く着せる。

さらにセーワーにはラーダーラマン神の座に装飾をほどこすことも含まれる。これらの費用は寺院が負担 (電気、プラサードの食材などを提供) する (C)。大きな祭礼の際は装飾もそれだけ盛大になるが、その費用がもし寺院から支出される予算額を超える場合にはセーワー担当者の負担となる (AおよびB)。座の装飾品購入先として決まった店がありなかには30-40年間同じ店もあるが、完全に固定ではない、時には店の商品の質や代金によって決めることもある (B)。

セーワーにおいて参拝者がダルシャンのときに神像が安置されている舞台に差し出す布施 (ダーン dāna) は全てがそのときの担当のプジャーリーの取り分になり、同時にこれがゴースワミー師の寺院から得られる唯一の収入となる (A.B.C)。なお、大きな祭りなどのときには装飾費用へのプジャーリーの個人負担が発生することもあるが、それでもセーワー担当期間中は損をすることはなく、必ず利益になる (C) という。



写真2

寺院内陣にてアールティーを行うプジャーリー（ゴースワミー師、2019年8月筆者撮影）。

ところで、寺院が発行する信徒向けの冊子 *Vratotsava Nirnaya* をみると、ヴィクラマーディティヤ暦での年間行事（名のついた儀礼や祭礼）の予定や、寺院への寄付者の名が記されている。ここに記されている儀礼や祭礼の数は年間で数百にのぼる。

6-2 プラサード

セーワーにはラーダーラマン神に捧げる食事の準備も含まれ、旧寺院の建物にある台所で調理される。現寺院の建物の裏手にある台所を訪れると同じ食事を残撰（これもプラサード）として受けることができる³¹。この調理も全てのゴースワミー師が輪番で担当する。年輩でかつ、後述するパンチャーヤトのメンバーであっても調理もする（セーワーはマネジメント職とは別のもの、B）。担当の人数は、プジャーリーと同じく2人いなくてはならない（A）が、料理は日に一度朝だけ調理（4時間程度、BおよびC）である³²。この竈の火は前述の創建以来燃え続けているという *akhanda vaidika agni / joti* であるが、現在でも木のみを燃料とすることができると決まっている（AおよびC）。

プラサードのメニューだいたい決まっており朝は44品、昼22品、夜36品以上で、揚げ物と牛乳、果物（ドライフルーツ含む）、真夏は果物ジュースなども出される。ただし料理に使う材料には規則がある。禁止されているものは肉類の他、野菜でも玉ねぎ、ニンニク、きのこ、ニンジン、ジャガイモ、カリフラワーは寺院に持ち込めない（A）、さらに過去インドになかったもの（じゃがいも、トマト、ニンジンなど植民地期以降にインドにやって来た食べ物）、そして赤唐辛子（B）、青・赤唐辛子、カリフラワーなどが不可

(C) とされる。使える材料は、生姜、ギー油のみ（野菜油は不可）(A)、かぼちゃ、さつまいも、キュウリ、サトイモ、ゴマ、カラスウリの一種、いくらかの豆（全て可ではない）、グリーンピース、黒胡椒 (B)、インドの砂糖、カレーリーフ、ラディッシュ、ニガウリ、ズッキーニの類、おくら、カラスウリ、タマリンド (C) などが使えるとのことであった。このように寺院の規則や施設は中世のまま (C) であるという。

7 寺院運営の組織

7-1 寺院パンチャーヤト

ラーダラマン寺院を運営する公的組織はパンチャーヤト (pañcāyata)³³ であり、パンチャーヤトが寺院運営のためのすべてのことがらを決定する (A)。正式名称は Pañcāyat Mandir Śrī Radhārajanī Mahāraj で、UP 州に「ソサエティ (Society)³⁴」として法的に登録された機関 (registered society) である (A および B)。最初の登録はイギリス植民地期の 1860 年施行の Society Act 下の 1881 年で、以来登録が更新されながら現在に至っている³⁵。

パンチャーヤトのメンバーは計 13 名で、セクレタリー (Secretary)、副セクレタリー (Vice Secretary)、出納責任者 (Treasurer) の各 1 名と、役職なしの委員 (Members) の 10 名で構成され、その任期は 3 年間である (A)。会議は 1 か月に 1、2 度開催で、何も重要事項がなければ 3 か月に一度のときもあるが、一応は定期的に開催される。会議には最低 4 名出席で、その場所は寺院内が前提だが必ずしも決まっていない。会議は公開だが、議論は 13 名の間のみで実施される (C)。なお調査期間の 2019 年時点では、2018 年からのパンチャーヤト体制で、インタビューした B 師はセクレタリー、C 師はメンバーである (B および C)。

3 年間の任期終了後にはすぐに次の選挙が実施される (C)。立候補制で、対抗者がいなければ自動的に当選、いれば選挙実施となる (B および C)。選挙権は 18 歳からで、つまり年齢上は全ての師が選挙権を持つことになる。ただし投票のためには基本的に寺院に來なくてはならない (C)。現在の任期の選挙人名簿を参考に B 師が数えたところ 5 家系の合計で 72 (存命 68) 名であった。

パンチャーヤトのメンバーは各家系 (5 つのターマー) から 2 名ずつ選ばれる (C) が、第 5 ターマーには 2 名のみ存命のためか、現在はこの 2 名ともパンチャーヤト委員には入っておらず、このターマーの 2 名分は他のターマーから出ている。なお、パンチャーヤトは再選可能 (13 名のうち、B 師も C 氏を含む 7 名が 2 期連続) である。パンチャーヤトの仕事は無給であり (C)、そのため必ずしも選挙に立候補する人は多くないと考えられる。

7-2 寺院の財政

ラーダーラマン寺院の財政を支える主な収入源は布施（ダーン）である（A）。しかし、前述のようにセーワーでの参拝者からのダーンは全てプジャーリーの取り分になるため、弟子やその他の信者から直接差し出されるものが寺院の収入になる（C）。ステイトバンク・オブ・インディアに口座もあるが、その窓口が寺院本殿内にあるパンチャーヤトの事務所で、ここにはゴースワミー師ではない事務員が務めている。そして、ラーダーラマン寺院には銀行に運用のための基金（corpus fund）をもっている。ここから得る定期利息（regular interest）やダーンなどでスムーズに寺院活動や維持をしていて、特別な時には支援者に寄付を求めることもある（B）という。

寺院全ての経営費用の年間予算は調査実施時点で500万インド・ルピーである（B）。これは電気、維持費、事務や掃除人員の給料なども含むが、セーワーのための費用がもっとも高額である（C）。

また同寺院は不動産なども所有していて、ブラジュ地方内のマトゥラー、ヴリンダーヴァン、ラーダークンドに財産がある（土地、店、ラーダークンドの寺院など）（AおよびB）。ただしこれらの権利は寺院のもので、ゴースワミー師個人にはない（B）。なお、ゲラー内にはいくつものゴースワミー家が住んでいるが、各家の建物は個人のもので寺院所有ではない、例えばB師は自分でこの家を建てた（B）。

税金については、インド憲法第27条の規定で寺院には税金はかからないため、所得税（income tax）も課せられていない³⁶。また、B師によると、所得税と商業税（commercial tax）の2種の税金があるが、ラーダーラマン寺院は商業活動もしていないので、どちらの税も州にも中央政府にも払っていない（B）としている。

ラーダーラマン寺院は単独で独立の宗派をなすものではない。あくまでチャイタニヤ派内の一寺院である。その理由として、同寺院は公式にはインドのどこにも末寺のようなものは持たず、寺院運営は単独で行っている。ラーダーラマン神を祀る同名の寺院はインドに多数あるが、そのような寺院とも本山末寺的な関係ではない³⁷（AおよびB）。その一方で、ヴリンダーヴァンのチャイタニヤ派七寺院内で直接的な宗派組織関係があるわけでもなく（C）、その点では独立性も認められる³⁸。加えて、同寺院はヴリンダーヴァンの聖地案内僧のパンダー（pandā）とも関係がない（AおよびB）³⁹。そして、ヴリンダーヴァンに住むベンガル人コミュニティとも直接の信徒組織の存在のようなつながりはない（AおよびB）が、概ねベンガル人は七寺院に関係しているともいう（B）。

8 ゴースワミー師の寺院外活動と弟子

8-1 ゴースワミー師の家計

ゴースワミー師には寺院から給料が払われることはないが、セーワーの輪番職が回っ

てくるのは約2年半に一度の頻度であり、さらにセーワー担当の期間はほとんどの師には数日長くても数十日であるので、これだけでは日々の生活費にはとても足りない。そして、ゴースワミー師は基本的にラーダーラマン寺院のみで働き、他のチャイタニヤ派七寺院のプジャーリーとして働くことはない(A)。

そのために、多くのゴースワミー師はセーワー期間外に行う別の仕事を持っている。60-70人のゴースワミー師のほとんどが寺院のゲーラー内あるいは寺院周辺に住んでいるが、ヴリンダーヴァン外に住み別の仕事を持っている人もいる(B)。何人かのゴースワミー師は個人の寺院を持ってもいる。例えば、B師は個人の小規模なチャイタニヤ寺院でセーワーをしているのに加え、ヴリンダーヴァンの新市街にホテルを所有しているという(AおよびB)。

8-2 ゴースワミー師の弟子

ラーダーラマン寺院には、日々のダルシャンでも大きな祭礼でも、近隣住民あるいは遠方からの巡礼など多くの信徒が訪れる。しかし、彼らは日本の仏教寺院の檀家のような形で同寺院に所属しているわけではなく、各々ゴースワミー師の直接の弟子(*sisya*)となっている(師からディークシャーを受けることで弟子になる)。同寺院には寺院の建物以外の財産もあるとのことだったが、実際にはこのような篤信の信徒による寺院への高額の寄付が寺院の財政を支えていると推測される。高額の寄付をした信徒の名前は毎年発行される寺院の冊子 *Vratotsava Nirṇaya* に、寄付の用途と金額、寄付のきっかけとなった人物(*preraka*)の名とともに記される。

多くのゴースワミー師は自らの弟子を持っていて、B師はインド全体でおよそ2000人以上の弟子がいるというが、一方比較的若いC師には現在までのところ弟子はいない。基本的に、新しく弟子になるものは自ら師としたいゴースワミー師にディークシャーを求めてやってくる(師の方から勧誘することはない、AおよびB)。そのきっかけは誰かから師のことを聞いて、師の講話(後述)を聞いてなど(A)である。また例えばA師の場合、A師の父の弟子をA師とA師の弟とで受け継いでいるが、それは弟子自身の選択によって決まったという(A)。師の死後は親子間であっても自動的に移行することはなく、弟子自身で師を選択することができる(C)。ただし、ある弟子の師が亡くなり、その師の息子に受け継がれたとしても、あくまでディークシャーを受けた人の弟子としてあり続けるともいう(B)。なお、弟子は一人の師のみ持てる(A)。

ラーダーラマン寺院の弟子たちの団体はただひとつ、バナーラスに1914年設立の「シュリー・ラーダーラマン・セーワー・サミティ・カーシー」があり、最近はあまり活動していないが、ラーダーラマン寺院を支援していて(B)、現メンバーはおそらく100人で、事務所もある(A)という。

8-3 師弟の交流

師弟間では日常どのような交流があるのだろうか。弟子がヴリンダーヴァンに来た時以外に、昨今ではメールや携帯電話、SNS を使ってコンタクトを取る（三師とも Facebook も利用）ともいう（B）。実際に同寺院での日々の儀礼の様子や寺院外活動の様様を撮影・録画し、web 上で配信しているゴースワミー師や信徒もいる⁴⁰。

一方、伝統的に師弟が集う重要な機会は、講話のバーガヴァタ・カタール（Bhāgavata kathā）あるいは単にカタール（kathā、以下ではカタールと表記）とよばれるものである。カタールは主に『バーガヴァタ・プラーナ』の教えを説く催しで、概ね 5-7 日間の日程で開催される教えを語りと音楽とを通じて弟子に伝えるライブ活動と表現できる。会場は UP 州内や近隣のデリーにとどまらず、インドの他州、ときには外国であることも珍しくない⁴¹。

しかし、カタールの開催はそれ自体のみが目的でなく、各地の弟子たちと会うことこそが主目的だという。カタール期間中ゴースワミー師はその地に住む個々の信徒と会い、彼らの悩み（宗教的なこと以外にも家族や社会的な問題）の解決のため家族のようにさまざまな話を聞き、教義に沿ったアドバイスを与えるという（A.B.C）。ここから、師と弟子の関係であるゴースワミー師と信徒を有機的に結び付けるのは、寺院での参拝よりもむしろカタールの機会ではないかと考えられる。未確認であるが、師個人へのダーンも多くはこの時に行われるのであろう。ただし、カタールの活動はゴースワミー師がすでに一定数の自分の弟子を持っていることが前提であって、まだ若くそのような弟子を持たない師は、寺院儀礼や自身の父の活動の手伝いなどに専念している（C）。

おわりに

チャイタニヤ派の有力寺院であるラーダーラマン寺院は、祖を同じくする「40 家」も同じ親族の家系のゴースワミー師たちが同等の立場で神に仕えるという特徴的な組織を持っている。一方で寺院財政や活動の公的決定機関パンチャーヤトがあり、その人員は定期的な選挙で選ばれるなど、団体登録制も含めた法的制度下で寺院運営がなされている。

ゴースワミー師の最大の責務である寺院でのセーワーは実際には彼らの生活の糧を稼ぐより、むしろ寺院と自分たち「40 家」の伝統を守るためのものであると考えられる。一方で、伝統的大寺院に属する高い宗教的権威を持つ個々の宗教者として各々に寺院外で多くの弟子をもち、そこでの活動（カタール）が師弟の紐帯を深めている。それが結果的にゴースワミー師と寺院双方の支援となり、さらなる寺院の発展につながっているものと考えられる。

謝 辞

本研究のための2度のインド・ヴリンダーヴァンでの調査は、東洋大学の2018年度「井上円了記念研究助成」および、公益財団法人中村元東方研究所の2019年度「アジア諸国海外研究・調査助成」により実現しました。本稿執筆にあたっては東洋大学の2019年度「井上円了記念研究助成」も受けることができました。ここに記して両機関に感謝申し上げます。

ヴリンダーヴァン調査期間中は Śrī Caitanya Prem Sansthān (Jaisingh Gherā) での滞在によって円滑な調査が可能となりました。宿泊を許可くださったシュリーワッツ・ゴースワミー師 (Rev. Śrī Śrīvatsa Goswāmī jī Mahārāj)、同師を紹介してくださった坂田貞二先生 (拓殖大学名誉教授) と橋本泰元先生 (東洋大学文学部)、そして調査に協力いただいたラーダーラマン寺院の関係者のみなさんに、この場をお借りして感謝申し上げます。

注

- 1 ブリンダーヴァン (Brindāvana) とも表記される。
- 2 ラーダーラマン寺院は、現地の人々からは人間の敬称にも使う jī を付けた「ラーダーラマン様 (Rādhāramaṇa jī)」と呼ばれることが一般的である。
- 3 前田専学「チャイタニヤ」、辛島昇 他監修『新版 南アジアを知る事典』平凡社、2011年。
- 4 例えば、坂田貞二、橋本泰元「中世インドにおける宗教家の旅と思想形成」、『歴史学研究』第582号 (pp.33-49、p.61)、1988年7月。
- 5 坂田、橋本「中世インドにおける宗教家の旅と思想形成」(p.47)、1988年
- 6 サンスクリット語では Vraja。
- 7 デリーからは車で3-4時間ほど。町の近くまで NH2 (国道2号線) とヤムナー・ハイウェイが通じている。さらにマトゥラー経由で列車や長距離バスでも容易にアクセスが可能である。
- 8 Entwistle, Alan *Braj: Centre of Krishna Pilgrimage*, Groningen: Egbert Forsten, 1987
- 9 坂田貞二、橋本泰元「16世紀北インドの巡礼案内書に見られるブラジュ地方の聖地」、『研究年報』第16号 (pp.179-212)、1988年
- 10 坂田貞二、橋本泰元、井上多佳子、福永正明「地上の展開を歩く人々—北インドにおけるクリシュナ信仰と集団巡礼」、『アジア・アフリカ言語文化研究』第37号 (pp.69-121)、1989年
- 11 橋本泰元「クリシュナの愛の遊戯をめぐる」、『コッラニ』13号 (pp.36-63)、1989年、および、同「(二) 寺院勤行」、宮本久義、橋本泰元、山下博司『ヒンドゥー教の事典』(pp.226-235) 東京堂出版、2005年
- 12 Hawley, John Stratton in Association with Shrivatsa Goswami *At Play with Krishna Pilgrimage Dramas from Brindavan*, New Jersey, Princeton University Press, 1981
- 13 及川弘美「ラーダーラマン寺院のムールティー (神像) について」、『東方』第17号 (pp.94-110)、2002年
- 14 Goswami, Shrivatsa, *Celebrating KRISHNA*, Vrindavan, India, Sri Caitanya Prema Sansthan, 2001
- 15 Case, Margaret H, *Seeing Krishna, The Religious World of a Brahman Family in Vrindavan*, Delhi, Oxford University Press, 2000
- 16 田中多佳子『ヒンドゥー教徒の集団歌謡——神と人との連鎖構造』世界思想社、2008年
- 17 本稿のもととなったヴリンダーヴァンでの調査は、2019年2月18日 - 3月2日および2019

年8月12日 - 8月30日に実施されたものである。

- 18 聞き取り後の検討で、ゴースワミー師本人の誤解や勘違いにもとづく回答もいくつか見受けられたが、本稿の内容についての文責は全て筆者にある。
- 19 シャーリグラマとも呼ばれる、ヴィシュヌ神の化身ともみなされ神聖視されている石のことで、ネパールのガンダギー川で取れる丸い黒色のアンモナイトである。崇拜される由来は『バーガヴァタ・プラーナ』にあるという（立川武蔵、石黒 淳、菱田邦男、島岩『ヒンドゥーの神々』（pp.221-222）、せりか書房、1980年）。
- 20 ラーダーラマン寺院が毎年信徒向けに発行している *Vratotsava Nirṇaya*, n.d.（ただし2018年度版と考えられる）参照。また現在もこの顕現の日にはラーダーラマン・ジャヤンティー生誕祭を祝っている。
- 21 坂田、橋本「16世紀北インドの巡礼案内書に見られるブラジュ地方の聖地」（p.194）
- 22 ゴパール・バットは出家で生涯未婚だったため、子孫がいなかったとされる。
- 23 ゴースワミー (goswāmi) とは宗教者への尊称の他に、「ヴィシュヌ信仰諸派の後継者」という意味もある（古賀勝郎、高橋 明 編『ヒンディー語 = 日本語辞典』大修館書店、2006年、p.366）。
- 24 なおB師も最初はこの質問には40家と答えた。
- 25 マーガレット・ケースは42家としている（Case, Margaret H, *Seeing Krishna, The Religious World of a Brahman Family in Vrindavan*, p.22, 2000）
- 26 橋本「(二) 寺院勤行」、宮本、橋本、山下『ヒンドゥー教の事典』（p.227）、2005年。また、ヴリンダーヴァンの「七寺院」で祀られているクリシュナ像は、大きさなどの違いはあるが、みなこの姿勢である。
- 27 Goswami, Shrivatsa, *Celebrating KRISHNA*, pp.105-117, 2001
- 28 アールティーと寺院内での年間の祭礼について詳しくは、橋本「(二) 寺院勤行」、宮本、橋本、山下『ヒンドゥー教の事典』（pp.227-235）、2005年を参照のこと。
- 29 原義は「見ること」だが、神像を拝謁することも意味する。
- 30 筆者が訪問した限りではヴリンダーヴァンで外国人を締め出すヒンドゥー教の寺院はなかった。
- 31 台所の建物には調理場以外は外国人の筆者も2度の訪問とも入場を許され、残撰をいただくことができた。
- 32 竈の火のまわりは暑く、夏には60度に達する（C）、とのことである。
- 33 本来パンチャーヤトは、伝統的にはインドで伝統的な村落の、現在では選挙で決まる村単位の行政制度である。また寺院運営において必ずあるものでもない。
- 34 インドには宗教活動に対してソサエティ・アクト（法）とトラスト（Trust）・アクトの2種があり、ラーダーラマン寺院はソサエティ・アクトの下で活動している。チャリティ組織はトラスト管轄下になる（ラーダーラマン寺院はチャリティ活動をしていない）。ソサエティ・アクトで5年ごとに政府からリニューアルされる（B）。
- 35 現在同寺院のパンチャーヤトは「No.115 / 1980-1981」で登録されている。同寺院のHP (<http://www.radharamanmandir.com/pages/members.html#>) を参照（最終アクセス日2019年10月15日）。なお、パンチャーヤトの設立年代はインタビューでは不明であった。
- 36 具体的には income ACT 12A の免除規定による（BおよびC）。
- 37 ただし、儀礼の次第や寺院の規則などは模倣されていることは多いという（AおよびB）。
- 38 ただし、七寺院のひとつゴークラーナダ寺院では、現在では正統に寺院を継ぐブラーマンであるゴースワミー師が途絶えているため、祭礼にて儀礼をおこなっているのはインタビューしたA師とC師である。
- 39 ただし、ヴリンダーヴァンではパンダーのコミュニティは強力だという（B）。
- 40 YouTubeでもそのような動画を多数視聴することができる。
- 41 B師はこれまでインド全国以外にも、海外15か国（アメリカ、イタリア、イギリス、フラン

ス、ドイツ、オーストリア、スイス、ポーランド、スウェーデン、ブラジル、南アフリカ、アルゼンチンなど)でカタールを開催したという。

キーワード：インド、ヴリンダーヴァン、チャイタニヤ派、ラーダーラマン寺院、
ゴースワミー